

現代アメリカを読み解く キーワードを知ろう

杉田 敏 (すぎた・さとし)

NHKラジオ「実践ビジネス英語」講師



20世紀に英語の語彙に取り入れられた約5000の「新語」を収録した20th Century Words (1999年Oxford University Press刊)にはhighやgrassといった基礎単語が含まれています。それぞれ1932年、1938年に初めて使われたとしていますが、実はこれらはアメリカのドラッグカルチャーの用語です。

highは「麻薬などでハイの状態になった」、grassは俗語でmarijuanaを意味します。それ以外にもマリファナや麻薬を意味する俗語には、bud (つぼみ)、herb (ハーブ)、weed (雑草)といった普通名詞があります。

インターネット後の用法

それと似たような現象が今起きています。internet slangとして、主に若者たちがインターネット以前の時代とは違った意味でいくつかの語句を使うようになってきているのです。(internetはかつては固有名詞扱いで大文字のIで始めたが、現在では普通名詞として小文字で始めるメディアが多くなっている)。

例えばlikeがそうです。現代では、SNSやブログなどへの「書き込み」に対する賛同や承認、あるいは感謝の意思表示の「いいね!」という意味でも使われます。

ちなみにpostやpostingは「(SNSなどへの)書き込み(をする)」「投稿(をする)」という意味で使われますが、postの従来の意味は「郵送する」(主にイギリス)、「貼り紙をする」で、postingも「投函」「郵送」といった意味の名詞でした。

friendは17世紀以降もっぱら名詞として用いられてきたのですが、最近は「SNS上の友だ

ちになる」という動詞としても使われるようになっていきます。「友だちになる」という意味の通常の動詞はbefriend。)その反対語はunfriendまたはdefriendで、「SNS上でfriendリストから削除する」ということです。

catfishは魚の「ナマズ」ですが、「SNS上で別の人間になりすますこと」「なりすまし」の意味で使われます。

普通名詞のtrollは「北欧伝説で、自然界に住み人間に敵対する超自然的な怪物」のことですが、インターネット・スラングでは「挑発的なメッセージ(を流す人)」「荒らし」のこと。

ghostは「幽霊」という名詞ですが、SNS用語では「突然一方的に連絡を絶って姿をくらます」という動詞です。インターネットのサイトなどでやり取りをしていた人が、「突然何の説明もせずに、電話でもメールでも連絡を取れなくなる」「(ちょっとした衝突から)音信不通になる」といった意味で使われます。

一般の辞書にはwokeという語は、wake(目が覚める)の過去形・過去分詞としか載っていませんが、若者たちは「政治的自己認識に目覚める」「社会の不公正、特に人種差別に関して敏感でいる」ことを表す形容詞として使います。名詞はwokenessです。

textは文字列のみで構成されるデータのことですが、現代では携帯電話で「文字メッセージを」送るという動詞としても使います。またそうした文のことはtexteseとかtextspeakと呼びますが、BTW (by the way)やIMHO (in my humble opinion)といった略字やXOXO (hugs

and kisses)などの一種の記号、あるいは絵文字などで構成されることもあります。

tweetは「(小鳥の) さえずり」のことですが、「ツイッター(Twitter)でのツイート」あるいは「ツイートする」「つぶやく」という動詞としても使います。retweetは、「他のユーザーのツイートを引用形式で自分のアカウントから発信する」「リツイート(する)」ということ。

unplugは「プラグ(差し込み)を抜く」ですが、「ある期間、デジタルあるいは電子機器を使わない」という意味です。

viralは「ウイルス」(virus)の形容詞形で、viral infectionはウイルス性の感染症ですが、go viralとよく使い「(インターネットを介してウイルスのように)またたく間に広がる、拡散する」という意味です。

今後、自動運転やAI、地球温暖化の時代には、現在の普通名詞がまったく違った意味で使われるようになるかもしれません。

新語、死語

couch potatoはアメリカの俗語で「運動をしないでソファに寝そべって、スナックを食べながらテレビやビデオを見てばかりいる人」のことで、1980年代から90年代にかけて流行した語です。日本でも1990年代に「カウチポテト族」としてマスメディアにもよく取り上げられましたが、現在ではあまり目にしなくなりました。というのもそうしたらだとテレビを見る生活様式が今ではもうあまりないからです。

日本でもアメリカでも、若い人たちはテレビ番組をあまり見なくなっています。代わって最近よく使われるのがbinge-watchingです。

通常はbinge-drinking(短時間に大量のアルコールを飲むこと)やbinge-eating(過食、ばか食い)と使うことが多いのですが、そこからの類推で「テレビを長時間見続けること」で、特にインターネットからダウンロードしたり、オンデマンドのドラマシリーズをまとめて見る、という意味で使われます。

1960年代のアメリカに開花したモール文化

も、現在は衰退の一途をたどっており、大型のshopping mallはどこも、online shoppingとの競争に敗退し、ゴースタウン化しています。mallという語が死語になるのも時間の問題のようです。それに代わる新しい語が、いずれ生まれてくることでしょう。

「カーボン紙」を見たことのない人も多くなっています。手動のタイプライターを使っていた時代には、コピーを取るために、紙と紙の間にカーボン紙を挟んで、力を入れて打ったものです。辛うじてその名前が残っているのは、手紙やメールに使われているcc, bccという略語で、それぞれcarbon copyとblind carbon copyのことです。

1970年代前半までは、liquid lunchの最盛期でもありました。実際、ビールやワインを飲みながら食事をするのではなく、固形物は食べずにもっぱらアルコールのみを飲み続けることで

似たような表現にthree-martini lunchもありましたが、こちらは主にクライアントなどと、ステーキやロブスターを食べながらマティーニを3杯も飲むような豪華な昼食のことです。

こうしたものはいずれも前世紀の遺物で、現代では昼食時にアルコールを飲む人は非常に少なくなりました。というのも接待費としての高額の食事代は、税制優遇措置がなくなったためといわれます。それに全般的な健康志向と、日中にアルコールを摂取することへの罪悪感などもありました。

昨年、アメリカのキャンパスで銃乱射事件があった時に、日本のある新聞が「怒りでわれを忘れる」「プチ切れる」をアメリカではgo postalと表現する、と解説していました。これは1980年代から90年代にかけて、アメリカの郵便局員が職場で起こした複数の銃乱射事件に由来するもので、そこから郵便局に限らず一般の職場において従業員や職員が突然怒り出し、暴力を振るったり、銃を発砲したりすることで傷害・殺人事件を引き起こすことを意味する俗語のフレーズになりました。

しかし、現在ではこの表現は、ほとんど目にしませんが、go berserkがそれに近いかもしれません。こうした発砲事件はmass shootingと呼ばれます。アメリカでは公立学校の9割でmass-shooting drillが行われています。日本の学校で定期的に行われている火事や地震、津波などを想定した避難訓練とも似ていますが、銃を持った侵入者から身を守るための訓練です。

小学校に入学する子どもにbulletproof panel(防弾パネル)の入ったbackpackをオンラインショップで買って与えるというのもアメリカの厳しい現実の一面です。

また、同じものを見ても、年代によって呼び名が違うものもあります。中年以上の人の多くは#をnumber signとかpound signと呼び、数字の前や後につけます。#9はNo. 9のこと、20#は20 poundsのことです。

一方、若者は#をhashtagと呼ぶでしょう。ソーシャルメディアにおいて、特定のテーマについての投稿を検索して一覧表示するための機能です。#MeTooは、セクハラや性的暴行の被害体験を告白・共有する際にSNSで使われます。

男女共学の大学で学ぶ学生は総称として、coeducationalを略したcoedと呼ばれていたのですが、この語はやがて、共学の大学で学ぶ女子学生を指すようになりました。しかし、しばしば軽蔑的に使われるのと男子学生を指す別の語がないため、今ではほとんど死語になっています。

ジェンダーの区別のない

ladies and gentlemenは、スピーチやアナウンスなどの冒頭で使う定番中の定番フレーズだったのですが、一昨年、ロンドンとニューヨークの地下鉄の乗務員が乗客に呼び掛ける際に、このフレーズの使用が禁止されました。LGBT(lesbian, gay, bisexual, transgender)という略語で表される性的少数者の権利を尊重しようという動きを反映したものです。

性別はmaleとfemaleの2つしかないが、ジェ

ンダーには、そのほかに「中性」(neuter)がある、というのが20年くらい前までの多くの人の理解でした。当時は主に文法上の区分としてしか意識されていなかったgenderですが、現在は「ジェンダーの区別のない」という意味でgender-neutral, gender-fluidを使います。

この世の中にいるのは、男と女だけではない、1か0かという2進法ではない、という意味でnon-binaryという語もよく目にします。

日本でも最近では、病院などの問診票に「男」「女」に加えて「その他」という項目もできています。また「ジェンダーフリー」なる語も使われているようですが、これは正しい英語の用法ではありません。もともと-freeは、ハイフンの前にある物質、要因など(通常は望ましくないもの)がないことを意味する語で、stress-free, email-free, barrier-freeなどと使われます。

「ジェンダーがない」という人はいません。ブログのTumblrは100以上のジェンダーを認めています。

アメリカの歌手や俳優などが最近よく自認するようになったpangenderという語は、「ジェンダーに関係なく、相手に性的・感情的・精神的な魅力を感じることでできる人」を意味します。

cisgenderは「出生時に診断された身体的性別(birth sex)と自分の性認識が一致し、それに従って生きる人」のことを指します。それに対して、transgenderは「自分の性と反対の性で生きようとする人」「性転換手術までは行わないが、身体の性と心の性が一致しない人」のことです。

英語にはactor - actress, hero - heroine, heir - heiressのように男性名詞と女性名詞が存在する場合には、性別に重きを置かない時、あるいは性別を明確にしたい時などに男性名詞を使うのが、現代では一般的になってきています。

職業名で女性形を表す-essが付いた語も英語の語彙から消えつつあります。最近では「女優」自身も自らをactorと称することが多く、actressは死語になりつつあります。同様にstewardessも使われなくなり、cabin attendant

あるいはflight attendantと言い換えられています。

三人称単数の代名詞

Everybody has a way of their own. (誰にもその人なりのやり方がある)という文では、主語は単数のeverybodyですから、それを受けるのも単数の代名詞が正しいとされてきたのですが、theirを使うことの方が優勢となってきています。特に口語ではこの傾向が顕著です。

英語では男女の区別のない三人称単数の代名詞がないので、正確にはhis or herあるいはhis/herとされました。しかし、それではかえって「堅苦しい」「気取った」と思われたり、毎回繰り返すことの煩雑さから、theyを単数の代名詞として使う用法が広まったとされます。そうした用法をsingular theyと呼びます。

それと同時にthemselvesという語も復活してきました。theyの再帰代名詞は本来themselvesなのですが、themselvesという単数形もあったのです。この語を収録していない大型の英語辞典

もありますし、いくつかの辞書は「非標準」としています。「ジーニアス英和辞典第5版」には「この単数形は長く使われていなかったが、単数のtheyの出現とともに復活してきた」という記述があります。

日本語の「さん」や「様」と同じように、相手の婚姻関係や性別とは無関係に、誰に対しても使うことのできる敬称がMx. です(発音はmixと同じ)。でも、それを「便利で非差別的」と受け取る人もいるでしょうし、Mx. と呼ばれることに抵抗感を持つ人もいるかもしれません。

アメリカのメディアではMx. はまだあまり使われていませんが、イギリスでは2013年以降、官庁や銀行での正式な書類や運転免許証やパスポートにも、この語が使われてきたそうです。今後はもっと目にする機会が増えると思われます。

Ms. が国連で採用されたり一般紙で使われるようになるまでには数年要したのですが、Mx. もいずれ広く使われるようになるかもしれません。

k

月刊 経団連 4月号

編集・発行
日本経済団体連合会
定価540円(本体500円)

購読申込
最寄りの書店またはインターネットから
<http://www.keidanren-jigyoservice.or.jp>
経団連事業サービスのホームページでお申し込みください。

特集 世界政治経済の展望と日本の針路

座談会
住友商事会長
みずほフィナンシャルグループ会長
日本電信電話会長
政策研究大学院大学長
(司会)事務総長

中村 邦晴
佐藤 康博
篠原 弘道
田中 明彦
久保田政一

寄稿
慶應義塾大学総合政策学部教授
武蔵野大学特任教授・東京大学名誉教授
日本エネルギー経済研究所理事長
内閣総理大臣補佐官

神保 謙
山内 昌之
豊田 正和
和泉 洋人
(ほか)

経団連出版 ご注文は <http://www.keidanren-jigyoservice.or.jp> 東京都千代田区大手町1-3-2 TEL 03-6741-0043

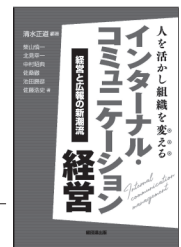
人を活かし組織を変える

インターナル・コミュニケーション経営

経営と広報の新潮流

清水正道 編著 柴山慎一・北見幸一・中村昭典・佐桑 徹・池田勝彦・佐藤浩史 著

グローバル展開を進める大企業から社員30人の企業までを取り上げ、職場で進められている働きがいを高める経営改革に向けたインターナル・コミュニケーション活動の仕組みを現場取材に解説を加えて紹介します。



A5判 272頁
本体2000円+税